「ヒルティの本質的なもの」

（『ヒルティ著作集』月報第11巻、昭和34年10月13日、白水社より転載）

１９５９年９月３０日

小池辰雄

誰か一人の人間の本質が何であるかを断定し得よう。しかし本質的なものが何であろうかについて私見を述べることはゆるされよう。その意味で私はここにヒルティの本質的なものについて論説的にではなく、感想的に述べてみようと思う。

彼はその『眠られぬ夜のために』第一巻の３月２６日の項で、

「私が最もよく理解した人々は、キリストであり、ヨハネであり、ダンテである。」

といっている。この三人の名がまずあげられているところに彼の本質的なものをうかがう秘鍵を直観する。ヒルティの著作が決して単なる頭脳の所産でなく、それは言の深き意味で実存的告白であることを感知するなら、彼の本質的なものは、あの頭脳の明敏にも拘らず、頭脳の面にあったのではなく、心魂の相にあったことを知る。そして彼の「最もよく理解した人々」が、やはり彼と同質的本質を具有する人々であったことは理の当然であろう。彼が劈頭にキリストを名ざしているところに、ある決定的なものを見たいと思う。キリスト─ヨハネ─ダンテという系譜は、歴史的にはさらにエレミヤへ、さらにホセアヘと遡ることができよう。

キリストの使徒ヨハネと使徒パウロと使徒ペテロの三人をその本質的なるものに従って表現するならば、ヨハネは愛、パウロは信、ペテロは望の使徒であるといってよかろう。しかもこの三者は皆その源泉をキリストにもっている。あだかも太陽の白光が分光されると虹のような多彩の光を現じ、しかも紅、黄、青等それぞれ特殊性において白光の本源の光が内蔵され底光を発しているように、パウロの信とペテロの望とヨハネの愛は円環関係をなしてキリストにおいて焦点を結び、キリストという実存そのものに帰一する。それは論理的統一ではなく有機体的連関である。

ヒルティがキリストを理解したというとき、彼の「理解」（verstehen）はヘブライ的聖書的な「知」であって、預言者ホセアまたエレミヤにおいて深くそうであったように、人格的に、霊的に、全実存的に「知る」ことである。またヨハネ福音書１０章１４、１５節の、

「私の羊はまた、私を知っている。それはちょうど、父が私を知っておられ、私が父を知っているのと同じである。そして私は羊のために命を捨てるのである」

といった深い生命が生命を知る知り方である。おのが意志をキリストの意志に全托してキリストの意志を知るのである。わが魂の呼吸をキリストの聖霊の呼吸の中で呼吸せしめて、キリストの霊生の呼吸を知るのである。パウロがあの「愛の讃歌」（コリント人への第一の手紙第１３章）で申すところのエピグノーシス（霊知）である。このような「知」はパウロにおいてもヨハネにおいても同じである。ただヨハネの知は托身的な愛の質であり、パウロの知は托身的な信の知である。そこに人格性の相異があり、把握の構造に相異が生ずる。パウロの「信」が、あのような罪の自覚を契機とした死生転換の、十字架、復活及び聖霊の深刻にして光輝ある信仰内容とその神学的展開の内実を豊かにもつ有機的構造として独特の雄健さをもつものであるに対して、ヨハネ的な「愛」は、内感的、直観的に体受されまた体現される実存態として、身証的、実践的であり、それはまた共同体的に限りなく展開する霊的生命の相として神秘的な深さをもつものである。

ヒルティは、そのようなヨハネと同じく、「キリストの胸によりそう」在り方に生きていた（ヨハネ13･23）。実にキリストのふところにその心は座を占めて呼吸をしていた。そのような在り方の秘密は、それではどこにあるのであろう。イエスは洗礼のヨハネからバプテスマを受けるまで、青少年時代の永い沈黙の時をどのように過ごしてきたか。そこにおいてイエスの魂が成長してきた秘義は何であったか。それはまさしく祈りのほかの何ものでもなかった。「時が満ちた」とは、イエスの側においてはイエスが祈りの人として充分の成長を遂げたことを意味する。であればこそイエスの受洗は単なる水のバプテスマではなく、み霊のバプテスマとして、父より豊かに聖霊をそそがれ、サタンとの乾坤を賭する荒野の一騎打となったのであった。ヒルティも祈りについて多くを語らない。彼が所謂「主の祈り」が徒らな空念仏になっている教会礼拝の現状を嘆いているのを見ても、所謂「お祈り」にはあきあきして、祈りについて多くを語りたくなかったのであろう。キリストのふところの中に、密室や山間のしずかな祈りで親しく祈り込み、聖霊のしずかな深い臨在、内住にあずかり、真の生命力や天的な智恵を賜り、そのような天的諸力の場において冥想思索し、豊富な体験と浩瀚な読書の果をよく消化し、変貌化体せしめ、さらにそれを地みちに日常生活で血となし肉としたればこそ、天来の権威をもったしみの心で真理を語り得たわけである。彼がこうした真理の告白を『幸福論』をもって世に訴え始めたのが５８才であったことを見ても、いかに彼の言が魂の祈りと生活の中から泉の如くあふれ出たものであるかを知る。

いかに彼がつねに新たに神とキリストに内奥の祈り心をもって近づいていたかは『眠られぬ夜のために』（Ｉ）２月１３日の項を読んでもよくうなずかれ得る。また彼の思索がいかに祈りと密接に関連していたかも彼の証言てあきらかである（同書５月２９日の項参照）。

神とキリストの愛を幼児の如く全的に受けて死に至るまで聖化栄光への道を辿り、死の関門を、旧約のエノクの如く、新約のパトモスのヨハネの如く、きわめて自然に通り被けて天国に入っていった彼の天的自然さは、彼の白髪の老顔にただよう童心慈眼にも予表されていた。彼はたましいの世界でのすべての矛盾も葛藤も、その豊かな教養も体験も実務も、すべて福音書のキリストの現前において聖書という溶鉱炉で溶解し、鍛錬し、浄化することを心得ていた。それはいわゆる分析でも総合でもなく、観念的な厳密さでも神学的な正確さによるのでもない。薬草や蜂蜜が不思議な治癒力をもっているように、無色透明な太陽光線が驚くべき生命力と浄化作用をもっているように、ヒルティは全キリストの白光的な生命を呼吸して、信仰とはいかなる現実であるかを証示し、真理をよくかみしめて人生万般の事象に対して判断をくだし、ねんごろな愛の心をもって誰にでも道しるべの燈火をかかげている。彼はこのように

「われは道なり真理なり生命なり」

の主体たるキリストを身受身証するたましいであった。

彼はまたこんなことを喝破した。いわく、

「われわれの思想体系などは神にとってなんら障害ではなく、神の霊の息吹きにふれればひとたまりもなくやぶれ去るクモのあみにすぎない。」（『眠られぬ夜のために』（Ⅱ）２月１１日参照）

ともあれ、彼の言説にカルヴィンのような神学的思想構造を要求するなら、それは要求ちがいである。それは丁度ヨハネにパウロ的な十字架の解明が欠けているといって非難したり、イエスの「放蕩息子」の譬話に十字架がないからキリスト教的でないと批判するなら、それは見当ちがいであるのと同然である。

いかなる天才といえども量的に神の完全に到着し得るものではない。イエスすらも地上ではきわめて貧しきたましいであった。否、実に魂の貧しさのきわみ、無的実存であったればこそ、神という無限なる天国者が彼の中に来臨したのである。それゆえ完全性があふれていた。

「幸なるかな、魂の貧しい人、天国はその人のものであるから」

とのイエスの言は、根源的には実にそのようなイエス自らの実存の告白であったのである。ヒルティもまたそのように、愛そのものなるキリストの中に侵って歩いていたこと、あだかも磁場の中の磁鉄の如くであった。彼のいう「幸福」も、そのように、天国を地上に体現する現在的終末の現実を証示するものであり、神の栄光の身証ということにおいてその真義を見るべきものであろう。そのような消息を語る言として、私は『眠られぬ夜のために』（Ⅰ）の１０月７日の彼の言を深く愛する。

「我ら一たび全く愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであろうとも、なお此処は美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きるための機会から成り立っているからである」

と彼の愛の魂は息吹いた。愛の国とは、キリストのみ霊の臨在し、内在するところであり、神的な無私の愛の体現される到るところに現在する現実である。すなわちそれは、一切の宗派や主義が黙し、世界観も社会説も、神学も教義を決定権をもたず、ただ誠心無私なる愛が体現される国である。神が親しくそこには共に宿るパラダイス的現実である。外的にはどんなに人間的な破れがあろうとも。しかし自己義認的なパリサイ的な偽善はこの国のものではない。

聖意体現を祈る無私の祈りの魂に白熱するこのような愛！　これこそ歴史の終末に、偉大なる壮美なる大実存共同体を招来すべき原子核的〔註：原始核的の誤植か〕なものである。これがヒルティが生涯を賭けて証言身証した愛であった。個人主義でも全体主義でもない。目ある者はヒルティの文字の奥から光ってくるこの愛の光を見、心ある者は彼の言の背後に滴るこの愛の涙を知るであろう。彼の墓碑銘の永遠の一言、

「愛は一切に勝つ！」

とは、実に万人救済の悲願であり、キリストの本願を語るものである。悲惨なる罪の世を担いあげる神の小羊の愛の勝利である（ヨハネ1･29）。かかる愛の芥種一粒となったヒルティなればこそ、彼の言は百世に亘って、万人の胸に愛の灯を点じゆくであろう。